

経年調査で敬語の変化をつかまえる

朝日祥之 (国立国語研究所)

1. はじめに

本発表では、国立国語研究所が行った敬語に関する調査と経年調査法による調査を概観し、岡崎調査の位置づけを試みる。それを手がかりとして、敬語の変化を経年調査によって明らかにする枠組みを提示する。

2. 岡崎調査の位置づけ

最初に、岡崎調査の位置づけから行うことにする。結論から言えば、岡崎調査は、「敬語、および敬語意識の変化を経年的に明らかにしようとした調査研究」と位置づけられる。以下では、岡崎調査の特色を明らかにするために、(1) 敬語研究としての性格 (§ 2.1) (2) 経年的変化研究としての性格 (§ 2.2) を整理する。

2.1. 敬語研究としての性格

岡崎調査の特色は具体的には、

(1) 敬語使用意識を調査した点

例：敬語に関する意識調査 (敬語の知識・意見・内省調査, スライド調査)

(2) 敬語使用実態を調査した点

例：敬語行動の観察調査 (引き回し場面録音調査, 張り込み場面録音調査)

(3) 敬語使用における心理的条件を調査した点

例：いぬ・ねこパーソナリティ調査

にある。敬語に関する調査には、この他に24時間調査による一個人の待遇表現に関する調査 (国立国語研究所 1971)、企業や学校など特定の社会集団を対象とした調査 (国立国語研究所 1982, 2002, 2003)、敬意表現に関する調査 (国立国語研究所 2006) などがある。いずれの調査研究にも特色があるが、岡崎調査の最大の特色は、上に示したように、敬語を多角的にとらえようとしたところにあると言える。

2.2. 経年的変化研究としての性格

岡崎調査のもう一つの特色としては、敬語の経年的変化をとらえたものである、ということである。経年調査とは、同一の内容の調査を、同一地点で一定期間をおいて実施するものである。異なる時点における調査データから言語変化をとらえることに主眼が置かれる。

国立国語研究所の調査研究で、経年的変化をとらえた

ものには、山形県鶴岡市、および、北海道における共通語化調査 (国立国語研究所 1997, 2007 等) が挙げられる。いずれも音声や文法、語彙などの言語的要素に見られる経年的変化の過程に迫ったものである。

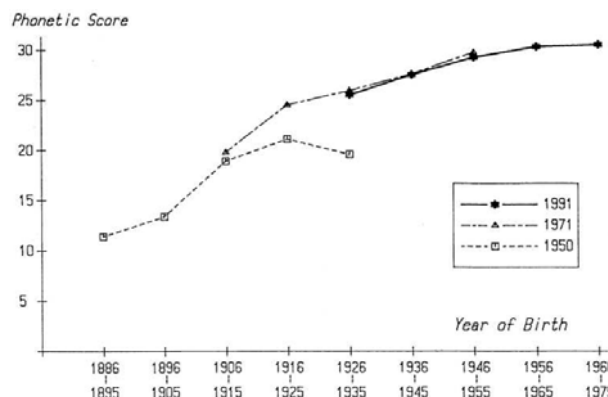


図1 鶴岡における音声項目の共通語化 (Yoneda 1997)

図1に示すように、例えば音声レベルにおける共通語化の過程が、経年調査から得られるのである。ここから、経年調査法は、言語変化の過程を知る上で有効であると言えよう。岡崎調査の特色としては、敬語変化のメカニズムをこの調査方法を用いながら解明することにある。

3. 岡崎調査における敬語の経年的変化

ここで、岡崎調査で実際に明らかにされた経年的変化を二つ紹介したい。

まず、「敬語の丁寧さ」の段階付けによる経年的変化である。岡崎調査では、「医師」「おつり」など12の場面における敬語使用について分析がなされた。

分析にあたって、調査データに見られる丁寧さを、表1に示す基準をもとに、三つの段階に分ける作業が行われた。この段階付けによって、「敬語の丁寧さ」が数量化されたのである。

第一次・第二次調査の結果を比較したのが図2である。図2から、二回の調査結果を比較することで、丁寧な場面はより丁寧に、ぞんざいな場面はよりぞんざいになる傾向が得られる。場面によって敬語の使い分けの幅が広がったと言い換えることも可能であろう。

表1 敬語の丁寧さの段階付け (三段階)

| | |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 段階1 | 大体二つの高い敬語形式の結合から成るもの (例) (…テ)ゴザイマス, (…シテ)イタダキマス (…シテ)クダサイマセ, イラシテクダサイ イラッシャイマセ |
| 段階2 | 「です・ます調」や一つの高い敬語形式から成るもの (例) …デス, …マス, (…シテ)クダサイ, イラッ シャイ |
| 段階3 | 高い敬語形式がないとみられるもの, および それよりさらに乱暴な形 (例) …ダ, …ヨ, …シテ(依頼), …シロ, 言い捨て(「電報用紙!」) 簡単な頼む言い方 (例) …シテクレ, …シテモラウ 目下などにしか使わない言語形式 (例) オクレ, オイデ, …(シ)ナサイ |

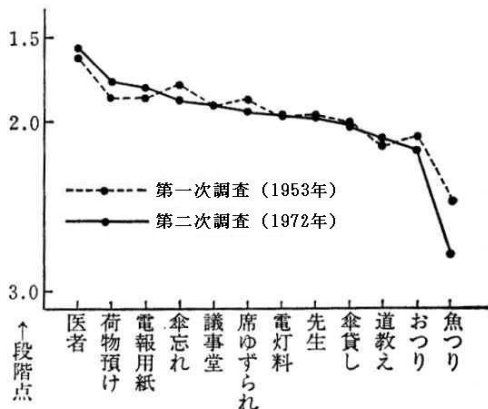


図2 丁寧さの段階付けの比較 (国立国語研究所 1983)

このような分析は敬語意識についても可能である。ここでは家庭内で年長者や目上の人に対する敬語使用意識を尋ねた結果を紹介する。

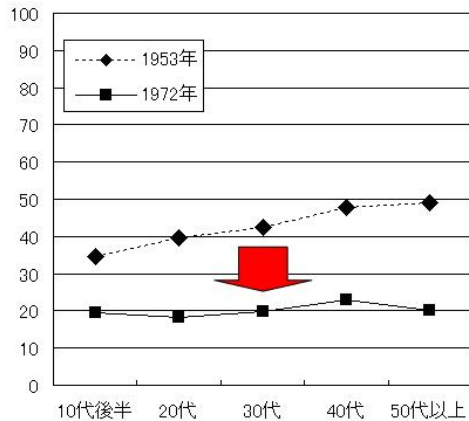


図3 家庭内で年長者や目上に「敬語を使うべき」割合

図3から、二回の調査の結果から、すべての年代で「敬語を使うべき」という回答率が下がっていることがわかる。言い換えれば、家庭内の敬語使用意識が変化している、ということになる。

4. おわりに：第三次調査に向けて

以上、岡崎調査に見られる特色を具体的な成果を用い

ながら紹介した。これをふまえると、第三次調査の設計にあたっては、次の二点を基本姿勢としたい。

(1) 多角的なアプローチによる調査を設計する

岡崎調査は、敬語を様々な角度から調査研究したものである。第三次調査は、このアプローチを継承したものとす。

(2) 経年的変化をとらえるために必要な調査は実施する

二回の調査データを十分に活用するために、敬語行動調査、敬語意識調査、敬語使用の心理的条件に関する調査を、その内容を慎重に検討した上で実施する。その際、留意すべき点を示しておく。

(1) 調査で取り上げられる場面のとらえ方

調査場面の認知の仕方には時代差が生じる。「物売り」「電報用紙」「電灯料」などの場面が該当する。現代社会の状況に相応した場面設定が必要である。

(2) 丁寧さの段階付けの扱い方

丁寧さ自体、直線的な関係で成り立っているものではなく、様々な方向性を持ち合わせたものである。丁寧さをより正確にとらえる枠組みを探索すべきである。

(3) 何をもって敬語の変化とするか

敬語の変化は、方言形が共通語形に置き換わる変化のように明示的な形で観察されるとは限らない。敬語の変化と認定する基準を策定すべきである。

参考文献

国立国語研究所 (1971). 待遇表現の実態—松江24時間調査資料から—。集英出版。

国立国語研究所. (1997). 北海道における共通語化と言語生活の実態 (中間報告). 国立国語研究所.

国立国語研究所. (1982). 企業の中の敬語. 三省堂.

国立国語研究所. (1983). 敬語と敬語意識—岡崎における20年前との比較. 三省堂.

国立国語研究所. (2002). 学校の中の敬語1—アンケート調査編—. 三省堂.

国立国語研究所. (2003). 学校の中の敬語2—面接調査編—. 三省堂.

国立国語研究所. (2006). 言語行動における「配慮」の諸相. くろしお出版.

国立国語研究所. (2007). 地域社会の言語生活—鶴岡における20年間隔3回の継続調査—. 国立国語研究所.

Yoneda, Masato. (1997). Survey of standardisation in Tsuruoka, Japan: comparison of results from three surveys conducted at 20-years intervals. *Japanese Linguistics* 2: 24-39.

連絡先

朝日祥之 〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
国立国語研究所 yasahi@kokken.go.jp